

子どもの死とグリーフケアについて考える 交流講座

グリーフケアを遺族ケアと考える医療従事者が少なくありませんが、遺族の多くは、あくまでそれはグリーフケアの一部で、子どもの生前、闘病中を中心に、子どもと家族のために手を尽くしてくださる医療行為そのものと、人間的な配慮の数々が、結果的に死別後の悲嘆を根底で支えるグリーフケアになると考えます。

そこで、当事者にとってのグリーフケアとは、どの段階で、何を、どのように行うことが望まれるのか？検討を重ねています。



第15回 医療的ケア児 “大樹の一生”

～産科・NICU・在宅医療・小児病棟を振り返り～

概要 出生直後から母子分離せざるを得ず、脳性麻痺となって健常な赤ちゃんのようには反応できない我が子。誕生から旅立ちまで、大樹の人生は医療と共にありました。面会制限や感染予防のため、生きているうちに会えた人は医療スタッフがほぼすべて。私たち家族も医療の介入を受ける生活が始まりました。先の見えない不安な将来を前に、1) 絶望的な状況の心境を理解してくれること、2) 精神的に追い詰められていく中で親の希望をくみ取りながら、できる限り要望に沿ってくれること、3) 反応できなくても息子を尊重し大切に対応してくれることに喜び、悲しんでいました。重度の心身障害で医療的ケア児の我が子の一生を振り返り、向き合った課題をお話しいたします。

体験発表後は、参加者（医療者）同士のディスカッションを充実させます。

発表者 「小さいのち」会員

対象 医療従事者

日時 2018年11月11日（日）10:45～13:00 **開場** 10:30

場所 関西学院大学梅田キャンパス 1004室 （茶屋町アプローズタワー10階）

定員 80人（要予約）

参加費 小さいのち（子どもを亡くした家族の会）の運営への支援として
一口500円の寄付を3口（1500円）以上でお願いいたします。

申し込み・問い合わせ s-ayumi@pop21.odn.ne.jp 会代表 さかした 坂下 ひろこ 裕子

主催 こども遺族の会「小さいのち」 <http://www.chiisanainochi.org/>